



4月上旬、オホーツク管内の遠軽町生田原を訪ねた。「オホーツク文学館」や「オホーツク文学碑公園」、「歌句碑ロード」などを見て回るのが目的だ。雨の予報だったが、高曇りで積雪もほとんど消えていた。

生田原のシンボルがJR生田原駅と図書館とオホーツク文学館を併設した複合施設だ。1993年に完成した。彫刻などのモニュメントも設置され、すぐ側に、町出資の生田原振興公社が経営する「生田原温泉ホテル・ノースキング」があり、温泉の日帰り利用、ビジネスや観光の宿泊客でにぎわっている。

探訪 北の風景 37

オホーツク文学館と文学碑公園

遠軽町生田原

青木和弘

なぜ、海に面していない生田原で「オホーツク」ということになるが、古代史に遡れば、遠軽町の内陸にある白滝地区は石器に使う黒曜石の一大産出地で、後期旧石器時代の遺跡がある。道内はもちろんサハリンやアムール川河口流域の遺跡でも白滝産の黒曜石の石器が見つかっている。この時代の遺跡は、千島列島はもちろん、シベリヤからカムチャツカ半島までオホーツク海沿岸一帯に広がり、「オホーツク文化」と呼ばれる。オホーツクは広大なエリアを網羅するニュアンスも含まれる。

ともあれ、オホーツク文学館には、根室市の納沙布岬から、知床、網走、北見、遠軽、紋別、枝幸から宗谷岬、樺太まで、オホーツクに関わる作家の足どりや作品などが展示されている。

高橋揆一郎「湧網線」、津村節子「さい果て」、渡辺淳一「流水への旅」、原田康子「風の砦」、八木義徳「風景」、中野重治「北見の海岸」、宮沢賢治「宗谷挽歌」など、オホーツクに対峙した文人たちの思いが伝わる資料である。

展示品を一つ一つ見ていくと、ここを訪れた作家たちが、流水の押し寄せる厳しい冬や、野生の花々が咲き誇る初夏など、北国のドラマチックな四季の移ろいと、人々の暮らしに強い印象を刻み込んでいることが分かる。

同文学館の収蔵品などは、北海道文学館の館長

オホーツク文学館の展示室



を務めた木原直彦氏の人脈によると、多いところが多いという。

文学館の次は「歌句碑ロード」に向かう。文学館を背に、真っ直ぐ国道を越え生田原川に架かる橋の手前右側の役場総合支所の裏側から、国道242号が北見側で川を渡る平和橋までの約1キロメートルの遊歩道がそれた。全国各地の愛好者が建てた歌碑275基が設置され、年に2、3基のペースで増えているという。歌や句を読みながら散策すると、あつという間に時間が経つ。

平和橋の手前の中央橋を渡ると「文学碑公園」があり、著名な作家の文学碑が19基設置されている。ここには、まだ雪が残る、短靴で歩くのには苦勞したが、長靴で散策した足跡があつたので、冬季は閉鎖中だが、雪が浅ければ碑を見て歩くことはできそう。サクラが咲き、新緑の季節、濃い緑に包まれる夏、紅葉の秋、雪の訪れる初冬まで十分楽しめる場所だ。

室蘭市出身で芥川賞作家の八木義徳の碑には、「北オホーツク沿岸」という碑文が刻まれていた。



生田原の町を見下ろす丘にあるオホーツク文学碑公園に設置された、詩人・更科源蔵の文学碑



生田原駅前周辺整備計画で建てられたＪＲ生田原駅と図書館とオホーツク文学館の複合施設。駐車場もあり、利用しやすい。生田原駅には石北線のすべての特急列車が停車するので旅行者にも便利だ。

「暮しのかかった言葉は美しい、と私はもう一度思った。この『海明け』という言葉は、オホーツク沿岸の漁師たちの痛切な生活実感のなから生れた言葉にちがいない。それは単に流水が去って海面が明けるという意味ばかりでなく、きびしくて憂鬱な永い冬がようやく去って、待望の春がやって来たという、いわば自然の幕明けを意味する言葉であり、同時に彼らの生活の幕明けを意味する言葉でもある。この言葉には明るい色彩があり、確かな実感がある、と私はまた思った。そうしてこの『海明け』という言葉は、私の記憶の中にしっかりと刻みこまれたのである」（八木義徳 小説「風景」より）

今後、現代の作家の展示や文学碑の設置も徐々に増えていくことだろう。貴重な記録の収集には、多くの支えと協力が必要になる。